

つくば市の不登校に関する児童生徒支援のあり方 (案)

つくば市教育委員会

令和5年（2023年）●月●日

目次

1	つくば市の不登校児童生徒支援に関する基本理念	2
(1)	つくば市の理念	2
(2)	国の理念	2
2	不登校児童生徒の現状と課題について	3
(1)	つくば市の不登校児童生徒の状況	3
①	つくば市の不登校児童生徒数 ^(※1) 及び割合	3
②	つくば市と茨城県の不登校児童生徒数割合	4
③	不登校の主な要因と欠席日数ごとの不登校児童生徒数	4
(2)	長期欠席児童生徒アンケート結果等からみるつくば市の不登校児童生徒の状況	5
①	欠席日数	5
②	学校に行かなかった(行けなかった)理由	6
③	学校を休んでいたときの児童生徒の気持ち・望むこと	8
④	保護者の思い	12
⑤	相談・対応に関すること	15
⑥	不登校に関する支援について保護者が望むこと(自由意見)	17
3	目指す学校のあり方	20
(1)	一人ひとりが自分の居場所を実感できる学校	20
①	安心を感じられる環境づくり	20
②	一人ひとりが自分らしく輝ける学校づくり	20
(2)	豊かな学校生活を送ることができる学校	20
①	多様性や個性を認め、伸ばす学校・学級づくり	20
②	分かる・楽しい主体的な学びができる学校・学級づくり	20
4	不登校児童生徒への支援策	21
(1)	学校内における支援	21
①	教員による教育相談	21
②	スクールカウンセラーによる教育相談	22
③	校内フリースクールの整備	22
(2)	学校外における支援	23
①	つくば市教育相談センターでの相談	23
②	学級担任による家庭訪問・スクールソーシャルワーカーによる訪問相談	24
③	公設の不登校児童生徒支援施設の設置	24
④	不登校児童生徒の保護者への補助	24
⑤	民間の不登校児童生徒支援施設の運営者への補助	25
⑥	保護者に対する相談支援	25
⑦	家庭にいる児童生徒への支援	25

1 つくば市の不登校児童生徒支援に関する基本理念

(1) つくば市の理念

つくば市では、一人ひとりが幸せな人生を送ることを最上位の目標とするつくば市教育大綱を令和2年(2020年)に策定し、各人の違いが受容され、それぞれが持っている多様で豊かな個性が花開く環境をつくることとした。

つくば市における不登校児童生徒支援は、不登校は問題行動ではないという認識の下、学校に登校することのみを目標にするのではなく、社会的自立に向けた力を育み、一人ひとりが幸せな人生を送ることができるよう、児童生徒の視点に立って様々な支援をしていく。「社会的自立」については、「社会との関わりの中で、他者との関係性を保ち、他者に依存したり自らが必要な支援を求めたりしながら、自分のできることを広げ、自分の意志と判断で、選択、決定し、自己実現することである」と解釈する。

そのために、不登校児童生徒の現状や支援ニーズの把握に努め、支援の現状を把握した上で、学校、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、不登校児童生徒を支援する者等が連携、協力して社会的な自立に向けた取組を行っていくこととする。

(2) 国の理念

文部科学省では、教育機会の確保等に関する施策を総合的に推進することを目的として、義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する法律(平成28年法律第105号)を施行した。同法第3条には、不登校児童生徒に対する教育機会の確保に関する施策について、以下の基本理念が示されている。

- 一 全ての児童生徒が豊かな学校生活を送り、安心して教育を受けられるよう、学校における環境の確保が図られるようにすること。
- 二 不登校児童生徒が行う多様な学習活動の実情を踏まえ、個々の不登校児童生徒の状況に応じた必要な支援が行われるようにすること。
- 三 不登校児童生徒が安心して教育を十分に受けられるよう、学校における環境の整備が図られるようにすること。
- 四 義務教育の段階における普通教育に相当する教育を十分に受けていない者の意思を十分に尊重しつつ、その年齢又は国籍その他の置かれている事情にかかわらず、その能力に応じた教育を受ける機会が確保されるようにするとともに、その者が、その教育を通じて、社会において自立的に生きる基礎を培い、豊かな人生を送ることができるよう、その教育水準の維持向上が図られるようにすること。
- 五 国、地方公共団体、教育機会の確保等に関する活動を行う民間の団体その他の関係者の相互の密接な連携の下に行われるようにすること。

また、令和元年には、「不登校児童生徒への支援のあり方について（元文科初第 698 号令和元年 10 月 25 日付け文部科学省初等中等教育局長通知）」が文部科学省から発出され、不登校児童生徒への支援は、「学校に登校する」という結果のみを目標にするのではなく、児童生徒が自らの進路を主体的に捉えて、社会的に自立することを目指す必要があることが示されている。

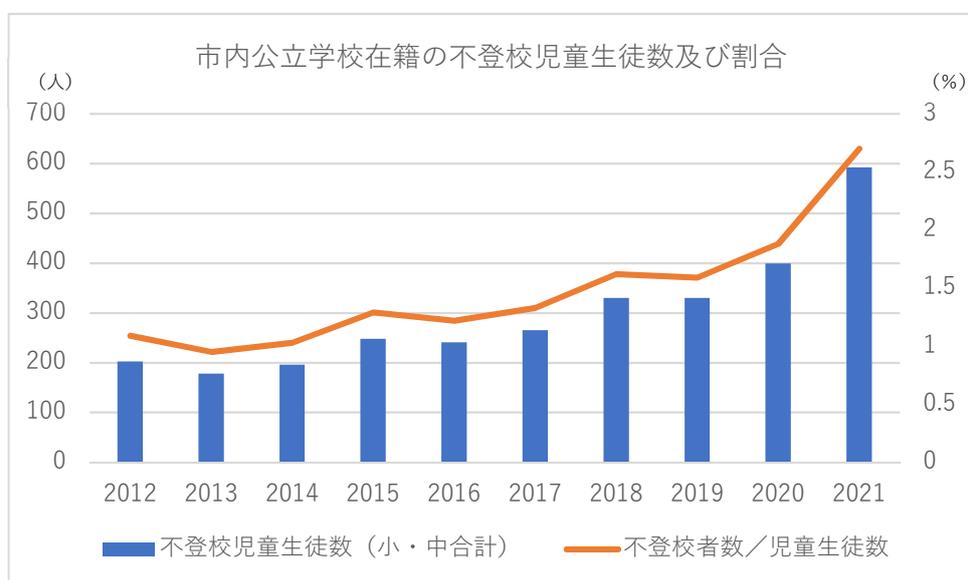
2 不登校児童生徒の現状と課題について

(1) つくば市の不登校児童生徒の状況

① つくば市の不登校児童生徒数^(※1)及び割合

つくば市では不登校児童生徒数が増加傾向にあり、全児童生徒数に対する不登校児童生徒数の割合も増加している。

(※1) 文部科学省に報告する年間欠席日数が 30 日以上の児童生徒数



② つくば市と茨城県の不登校児童生徒数割合

つくば市、茨城県ともに小学生に比べ中学生の方が不登校児童生徒数の割合が高い。つくば市における不登校児童生徒数の割合は年々増加しており、令和3年（2021年）は不登校児童生徒数の割合が小学生は1.57%、中学生は5.45%であった。小学生が0.35%、中学生が2.28%であった平成25年（2013年）と比較すると、小学生で1.22ポイント、中学生で3.17ポイント増加している。



③ 不登校の主な要因と欠席日数ごとの不登校児童生徒数

令和3年度末の不登校児童生徒数は592人（小学校243人、中学校349人）であった。

令和3年度不登校児童生徒要因別欠席日数別人数

主な 欠席 日数	本人		家庭			学校								その他	合計	割合
	生活 リズム等	無気力 不安	家庭 環境	親子 関係	家庭内 不和	いじめ	友人 関係	教職員	学業	進路	部活	きまり	進級			
30～49	23	64	20	3	0	0	19	0	8	2	0	2	2	8	151	25.5%
50～99	30	78	18	5	2	1	13	3	10	0	0	2	0	15	177	29.9%
100～149	17	87	9	5	0	0	10	1	5	0	0	0	0	4	138	23.3%
150～	10	65	16	6	1	0	14	3	3	0	0	1	1	6	126	21.3%
合計	80	294	63	19	3	1	56	7	26	2	0	5	3	33	592	
	374		85			100								33	592	

(2) 長期欠席児童生徒アンケート結果等からみるつくば市の不登校児童生徒の状況

令和4年(2022年)7月、学校生活での悩みや欠席の要因、希望する支援や対応等を把握し、つくば市や学校が今後行う支援のあり方を検討するため、令和3年度に年間30日以上在籍校を欠席した児童生徒及び保護者のうち、学校からアンケート用紙を配付することができた児童生徒及び保護者各581名を対象に、アンケート調査を実施した。以下、児童生徒を対象としたアンケートは「児童生徒アンケート」、保護者を対象としたものは「保護者アンケート」と表記する。

児童生徒アンケートの回答者数は、小学生71名、中学生102名、無回答2名の合計175名(回答率30.1%)であった。また、保護者アンケートの回答者数は、小学生の保護者85名、中学生の保護者116名、無回答1名の合計202名(回答率34.7%)であった。

児童生徒アンケートの回答者数(学年は、回答者自身の令和4年度の学年)

2年生	3年生	4年生	5年生	6年生	7年生	8年生	9年生	無回答	合計	小学生	中学生
7	13	12	14	25	24	33	45	2	175	71	102

保護者アンケートの回答者数(学年は、回答した保護者の児童生徒の令和4年度の学年)

2年生	3年生	4年生	5年生	6年生	7年生	8年生	9年生	無回答	合計	小学生	中学生
12	17	13	16	27	29	40	47	1	202	85	116

① 欠席日数

児童生徒アンケート(小学生 71名): 令和3年度に学校を欠席した、だいたいの日数

選択肢	回答数	割合
30日から60日	18	25.4%
60日から90日	11	15.5%
90日から180日	13	18.3%
180日以上(ほとんどすべて欠席した)	28	39.4%
無回答	1	1.4%

児童生徒アンケート(中学生 102名): 令和3年度に学校を欠席した、だいたいの日数

選択肢	回答数	割合
30日から60日	23	22.5%
60日から90日	24	23.5%
90日から180日	15	14.7%
180日以上(ほとんどすべて欠席した)	38	37.3%
無回答	2	2.0%

児童生徒アンケートによると、「令和3年度に学校を欠席した、だいたいの日数」としてあてはまるものは、小学生、中学生ともに「180日以上」が最も多かった。

② 学校に行かなかった（行けなかった）理由

児童生徒アンケート（小学生 71名）：学校に行かなかった（行けなかった）理由

選択肢	1 あては まる	2 やや あては まる	3 どち らとも えない	4 あま りあて はまら ない	5 まっ たくあ てはま らない	無回答	あてはま るの割合 (1+2)
身体の不調（学校に行こうとするとお腹が痛くなったなど）	24	11	6	7	23	0	49.3%
新型コロナウイルス感染症に関すること	11	9	6	10	35	0	28.2%
友達のこと（いやがらせやいじめがあったなど）	1	10	10	5	45	0	15.5%
学校の先生のこと（先生が怖かった、先生と合わなかったなど）	8	7	8	7	41	0	21.1%
勉強のこと（勉強がわからなかった、授業がおもしろくなかったなど）	9	14	10	6	32	0	32.4%
家庭のこと（親と仲が悪い、親の注意がうるさかったなど）	1	2	7	9	52	0	4.2%
生活リズムの乱れ（朝起きられなかったなど）	5	10	10	10	36	0	21.1%
なんとなくやる気がでなかった	15	16	8	8	24	0	43.7%
インターネット、ゲームなどの影響（楽しくてやめられなかったなど）	1	6	7	18	39	0	9.9%

児童生徒アンケート（中学生 102名）：学校に行かなかった（行けなかった）理由

選択肢	1 あては まる	2 やや あては まる	3 どち らとも えない	4 あま りあて はまら ない	5 まっ たくあ てはま らない	無回答	あてはま るの割合 (1+2)
身体の不調（学校に行こうとするとお腹が痛くなったなど）	34	19	6	19	23	1	52.0%
新型コロナウイルス感染症に関すること	2	9	5	10	75	1	10.8%
友達のこと（いやがらせやいじめがあったなど）	12	13	13	7	57	0	24.5%
学校の先生のこと（先生が怖かった、先生と合わなかったなど）	4	9	11	13	64	1	12.7%
勉強のこと（勉強がわからなかった、授業がおもしろくなかったなど）	18	21	16	7	38	2	38.2%
家庭のこと（親と仲が悪い、親の注意がうるさかったなど）	7	4	17	11	62	1	10.8%
生活リズムの乱れ（朝起きられなかったなど）	19	32	13	6	31	1	50.0%
なんとなくやる気がでなかった	41	20	10	9	21	1	59.8%
インターネット、ゲームなどの影響（楽しくてやめられなかったなど）	11	18	8	15	49	1	28.4%

児童生徒アンケートによると、「学校に行かなかった（行けなかった）理由」としてあてはまるものは、小学生は「身体の不調」、「なんとなくやる気がでなかった」、「勉強のこと」の順に多かった。中学生では「なんとなくやる気がでなかった」、「身体の不調」、「生活リズムの乱れ」の順に多く、全回答者の5割以上を占めていた。

両者を比較すると、「新型コロナウイルス感染症に関すること」が小学生では17.4ポイント高く、「生活リズムの乱れ」、「なんとなくやる気がでなかった」は中学生の方がそれぞれ28.9ポイント、16.1ポイント高かった。

保護者アンケート（小学生 71名）：学校に行かなかった（行けなかった）理由

選択肢	1 よくあてはまる	2 ややあてはまる	3 どちらともいえない	4 あまりあてはまらない	5 まったくあてはまらない	無回答	あてはまるの割合(1+2)
身体の不調	32	11	5	14	23	0	50.6%
新型コロナウイルス感染症に関すること	18	14	11	9	33	0	37.6%
友達のこと	5	14	9	15	41	1	22.4%
学校の先生のこと	13	13	11	15	32	1	30.6%
勉強のこと	7	16	16	15	30	1	27.1%
家庭の事情	6	5	15	14	44	1	12.9%

保護者アンケート（中学生 102名）：学校に行かなかった（行けなかった）理由

選択肢	1 よくあてはまる	2 ややあてはまる	3 どちらともいえない	4 あまりあてはまらない	5 まったくあてはまらない	無回答	あてはまるの割合(1+2)
身体の不調	47	21	11	15	18	4	58.6%
新型コロナウイルス感染症に関すること	5	21	15	25	47	3	22.4%
友達のこと	21	29	21	20	23	2	43.1%
学校の先生のこと	12	13	25	29	33	4	21.6%
勉強のこと	23	25	22	17	25	4	41.4%
家庭の事情	8	12	18	28	47	3	17.2%

保護者アンケートによると、子供が「学校に行かなかった（行けなかった）理由」としてあてはまるものは、小学生は「身体の不調」、「新型コロナウイルス感染症に関すること」、「学校の先生のこと」の順に多かった。中学生では「身体の不調」、「友達のこと」、「勉強のこと」の順に多く、全回答者の4割以上を占めていた。

両者を比較すると、「新型コロナウイルス感染症に関すること」が小学生では15.2ポイント高く、「勉強のこと」は中学生の方が14.3ポイント高かった。

③ 学校を休んでいたときの児童生徒の気持ち・望むこと

児童生徒アンケート（小学生 71名）：学校を休んでいたときに感じたこと、思ったこと

選択肢	1 よくあてはまる	2 ややあてはまる	3 どちらともいえない	4 あまりあてはまらない	5 まったくあてはまらない	無回答	あてはまるの割合(1+2)
勉強の遅れが心配だった	13	20	13	6	18	1	46.5%
友達との関係が心配だった	11	12	7	9	31	1	32.4%
ほっとした、安心した	15	12	18	10	15	1	38.0%
気持ちが落ち込んだ	9	12	10	11	27	2	29.6%
学校に行きたかった	14	15	10	8	23	1	40.8%
自由な時間が増えてうれしかった	18	14	16	13	9	1	45.1%

児童生徒アンケート（中学生 102名）：学校を休んでいたときに感じたこと、思ったこと

選択肢	1 よくあてはまる	2 ややあてはまる	3 どちらともいえない	4 あまりあてはまらない	5 まったくあてはまらない	無回答	あてはまるの割合(1+2)
勉強の遅れが心配だった	38	28	8	8	15	5	64.7%
友達との関係が心配だった	19	14	16	16	31	6	32.4%
ほっとした、安心した	15	14	33	10	26	4	28.4%
気持ちが落ち込んだ	22	16	19	13	27	5	37.3%
学校に行きたかった	11	16	21	18	31	5	26.5%
自由な時間が増えてうれしかった	24	26	16	18	13	5	49.0%

児童生徒アンケートによると、「学校を休んでいたときに感じたこと、思ったこと」としてあてはまるものは、小学生は「勉強の遅れが心配だった」、「自由な時間が増えてうれしかった」、「学校に行きたかった」の順に高く、全回答者の4割以上を占めた。中学生では「勉強の遅れが心配だった」、「自由な時間が増えてうれしかった」、「気持ちが落ち込んだ」の順に高かった。

「勉強の遅れが心配だった」と回答した割合は、中学生の方が小学生よりも18.2ポイント高く、中学生の約3分の2が勉強の遅れを懸念していることが示された。一方で、「学校に行きたかった」と回答した割合は、小学生の方が中学生よりも14.3ポイント高かった。

児童生徒アンケート（小学生 71名）長期欠席中の対応でいやだった対応

選択肢	1 よくあてはまる	2 ややあてはまる	3 どちらでもない	4 あまりあてはまらない	5 まったくあてはまらない	無回答	あてはまるの割合(1+2)
先生の家訪問	4	5	6	13	41	2	12.7%
先生と面談で話すこと	5	2	12	12	38	2	9.9%
友達からの声かけ	3	10	11	13	33	1	18.3%
学校以外の相談窓口で相談すること	2	3	15	7	42	2	7.0%

児童生徒アンケート（中学生 102名）長期欠席中の対応でいやだった対応

選択肢	1 よくあてはまる	2 ややあてはまる	3 どちらでもない	4 あまりあてはまらない	5 まったくあてはまらない	無回答	あてはまるの割合(1+2)
先生の家訪問	9	9	26	14	39	5	17.6%
先生と面談で話すこと	12	11	24	19	31	5	22.5%
友達からの声かけ	11	12	24	13	37	5	22.5%
学校以外の相談窓口で相談すること	7	7	19	11	50	8	13.7%

児童生徒アンケートによると、「いやだった対応」としてあてはまるものは、小学生、中学生ともに「友達からの声かけ」が最も多かった。さらに、中学生は「先生と面接で話すこと」も「友達からの声かけ」と同ポイントで、いやだった対応であった。

児童生徒アンケート（小学生 71名）：どんな学校だったら行きたいと思うか

選択肢	1 よくあてはまる	2 ややあてはまる	3 どちらでもない	4 あまりあてはまらない	5 まったくあてはまらない	無回答	あてはまるの割合(1+2)
いつ行ってもいい	25	17	11	5	12	1	59.2%
ゆっくり休める場所がある	22	22	9	8	10	0	62.0%
一人になれる場所がある	18	13	15	10	15	0	43.7%
好きな勉強ができる	22	28	10	5	6	0	70.4%
友達といっぱい遊べる	34	11	11	8	7	0	63.4%
気軽に先生と話せる	25	14	11	12	9	0	54.9%
先生が声をかけてくれる	18	14	19	13	7	0	45.1%
特にない	9	5	20	7	29	1	19.7%
わからない	9	9	16	6	30	1	25.4%

児童生徒アンケート（中学生 102名）：どんな学校だったら行きたいと思うか

選択肢	1 よくあてはまる	2 ややあてはまる	3 どちらでもない	4 あまりあてはまらない	5 まったくあてはまらない	無回答	あてはまるの割合(1+2)
いつ行ってもいい	37	24	15	8	15	3	59.8%
ゆっくり休める場所がある	50	16	14	6	12	4	64.7%
一人になれる場所がある	39	18	13	14	14	4	55.9%
好きな勉強ができる	38	24	16	7	13	4	60.8%
友達といっぱい遊べる	25	16	25	19	13	4	40.2%
気軽に先生と話せる	27	24	22	9	16	4	50.0%
先生が声をかけてくれる	21	18	27	13	18	5	38.2%
特にない	21	7	28	9	32	5	27.5%
わからない	13	8	29	10	35	7	20.6%

児童生徒アンケートによると、「どんな学校だったら行きたいと思うか」にあてはまるものは、小学生は「好きな勉強ができる」、「友達といっぱい遊べる」、「ゆっくり休める場所がある」の順に多く、全回答者の6割以上を占めた。さらに、「いつ行ってもいい」、「気軽に先生と話せる」も全回答者の半数以上を占めた。

一方、中学生では「ゆっくり休める場所がある」、「好きな勉強ができる」、「いつ行ってもいい」の順に多く、回答者の約6割以上を占めた。さらに、「一人になれる場所がある」、「気軽に先生と話せる」も全回答者の半数以上を占めた。

両者を比較すると、「友達といっぱい遊べる」は小学生の方が中学生よりも23.2ポイント高く、「一人になれる場所がある」は中学生の方が小学生よりも12.2ポイント高かった。

児童生徒アンケート（小学生 75名）：学校を休んでいるときにあったと思うもの

選択肢	1 よくあてはまる	2 ややあてはまる	3 どちらでもない	4 あまりあてはまらない	5 まったくあてはまらない	無回答	あてはまるの割合(1+2)
勉強を教えてくれる人	6	11	25	9	17	3	23.9%
一緒に遊ぶ人	22	22	9	8	10	0	62.0%
相談できる人	18	13	15	10	15	0	43.7%
一人になれる場所	22	28	10	5	6	0	70.4%
一人になれる時間	34	11	11	8	7	0	63.4%
人が集まる場所	25	14	11	12	9	0	54.9%
特にない	18	14	19	13	7	0	45.1%

児童生徒アンケート（中学生 102名）：学校を休んでいるときにあったと思うもの

選択肢	1 よくあてはまる	2 ややあてはまる	3 どちらでもない	4 あまりあてはまらない	5 まったくあてはまらない	無回答	あてはまるの割合(1+2)
勉強を教えてくれる人	28	20	14	14	19	7	47.1%
一緒に遊ぶ人	50	16	14	6	12	4	64.7%
相談できる人	39	18	13	14	14	4	55.9%
一人になれる場所	38	24	16	7	13	4	60.8%
一人になれる時間	25	16	25	19	13	4	40.2%
人が集まる場所	27	24	22	9	16	4	50.0%
特にない	21	18	27	13	18	5	38.2%

児童生徒アンケートによると、「学校を休んでいるときにあったと思うもの」は、小学生は「一人になれる場所」、「一人になれる時間」、「一緒に遊ぶ人」の順に多く、全回答者の6割以上を占めた。中学生では「一緒に遊ぶ人」、「一人になれる場所」、「相談できる人」の順に多かった。

両者を比較すると、「一人になれる時間」は小学生の方が中学生よりも23.2ポイント高く、「勉強を教えてくれる人」、「相談できる人」は中学生の方が小学生よりもそれぞれ23.2ポイント、12.2ポイント高かった。

④ 保護者の思い

小学生の保護者アンケート（85名）：お子さんが学校を休んでいるときに過ごしてほしい場所

選択肢	1 あては まる	2 やや あては まる	3 どち らとも えない	4 あま りあて はまら ない	5 まっ たくあ てはま らない	無回答	あてはま るの割合 (1+2)
勉強を教えてくれる場所	21	25	13	7	18	1	54.1%
自由に過ごせる場所	36	25	9	3	11	1	71.8%
一人で遊べる場所	28	21	12	7	16	1	57.6%
のんびりできる場所	36	20	14	5	9	1	65.9%
誰かと関われる場所	29	6	9	9	31	1	41.2%
特にない	10	0	7	0	9	59	11.8%

中学生の保護者アンケート（116名）：お子さんが学校を休んでいるときに過ごしてほしい場所

選択肢	1 あては まる	2 やや あては まる	3 どち らとも えない	4 あま りあて はまら ない	5 まっ たくあ てはま らない	無回答	あてはま るの割合 (1+2)
勉強を教えてくれる場所	54	30	16	7	5	4	72.4%
自由に過ごせる場所	41	30	22	12	7	4	61.2%
一人で遊べる場所	32	28	22	19	11	4	51.7%
のんびりできる場所	43	33	18	12	6	4	65.5%
誰かと関われる場所	30	21	23	15	24	3	44.0%
特にない	6	2	8	7	17	76	6.9%

保護者アンケートによると、「お子さんが学校を休んでいるときに過ごしてほしい場所」は、小学生は「自由に過ごせる場所」、「のんびりできる場所」、「一人で遊べる場所」の順に多かった。中学生では「勉強を教えてくれる場所」、「のんびりできる場所」、「自由に過ごせる場所」の順に多かった。

両者を比較すると、「自由に過ごせる場所」は、小学生の方が中学生よりも 10.6 ポイント高く、「勉強を教えてくれる場所」は、中学生の方が小学生よりも 18.3 ポイント高かった。

小学生の保護者アンケート（85名）：お子さんのことで困っていること

選択肢	1 あては まる	2 やや あては まる	3 どち らとも えない	4 あま りあて はまら ない	5 まっ たくあ てはま らない	無回答	あてはま るの割合 (1+2)
勉強の遅れや学力の低下	24	18	10	14	16	3	49.4%
進路（進学・就職など）	15	17	9	19	22	3	37.6%
昼夜逆転など生活リズムの乱れ	5	13	8	21	35	3	21.2%
ゲームやインターネット依存	11	16	19	15	21	3	31.8%
家族に対する暴言や暴力	1	8	3	13	57	3	10.6%
気持ちが不安定になっている（イライラ、焦り、不安など）	6	22	8	14	32	3	32.9%

中学生の保護者アンケート（116名）：お子さんのことで困っていること

選択肢	1 あては まる	2 やや あては まる	3 どち らとも えない	4 あま りあて はまら ない	5 まっ たくあ てはま らない	無回答	あてはま るの割合 (1+2)
勉強の遅れや学力の低下	58	27	11	8	3	9	73.3%
進路（進学・就職など）	61	22	12	10	3	8	71.6%
昼夜逆転など生活リズムの乱れ	24	22	9	28	24	9	39.7%
ゲームやインターネット依存	25	30	23	17	12	9	47.4%
家族に対する暴言や暴力	3	10	9	15	70	9	11.2%
気持ちが不安定になっている（イライラ、焦り、不安など）	18	31	15	22	22	8	42.2%

保護者アンケートによると、「今、お子さんのことで困っていること」は、小学生は「勉強の遅れや学力の低下」、「進路（進学・就職など）」、「気持ちが不安定になっている」の順に多かった。中学生は「勉強の遅れや学力の低下」、「進路（進学・就職など）」、「ゲームやインターネット依存」の順に多かった。特に前2項目については7割以上の保護者があてはまるとしていた。

両者を比較すると、全ての項目で中学生の方が小学生よりもあてはまる割合が多かった。両者の差が大きい主なものは、「進路（進学・就職など）」、「勉強の遅れや学力の低下」、「昼夜逆転など生活リズムの乱れ」、「ゲームやインターネット依存」が挙げられ、それぞれ34.0ポイント、23.9ポイント、18.5ポイント、15.6ポイントの順に差があった。

小学生の保護者アンケート（85名）：保護者として困っていること

選択肢	1 あては まる	2 やや あては まる	3 どち らとも えない	4 あま りあて はまら ない	5 まっ たくあ てはま らない	無回答	あてはま るの割合 (1+2)
悩みを聞いてもらえる機関や場所が見つからない（または分からない）	2	10	18	22	30	3	14.1%
子供とどう関われば良いか分からない	3	15	12	17	35	3	21.2%
学校の情報が入ってこない	2	8	18	26	29	2	11.8%
学校を休むことについて家族の理解が得られない	2	9	7	24	42	1	12.9%
金銭的な負担が増えた	24	16	8	15	21	1	47.1%

中学生の保護者アンケート（116名）：保護者として困っていること

選択肢	1 あては まる	2 やや あては まる	3 どち らとも えない	4 あま りあて はまら ない	5 まっ たくあ てはま らない	無回答	あてはま るの割合 (1+2)
悩みを聞いてもらえる機関や場所が見つからない（または分からない）	7	22	20	31	28	8	25.0%
子供とどう関われば良いか分からない	6	25	16	33	28	8	26.7%
学校の情報が入ってこない	7	25	20	33	23	8	27.6%
学校を休むことについて家族の理解が得られない	8	19	9	34	44	2	23.3%
金銭的な負担が増えた	24	24	19	24	22	3	41.4%

保護者アンケートによると、「今保護者として困っていること」は、小学生は「金銭的な負担が増えた」、「子供とどう関われば良いか分からない」、「悩みを聞いてもらえる機関や場所が見つからない（または分からない）」の順に多かった。中学生は「金銭的な負担が増えた」、「学校の情報が入ってこない」、「子供とどう関われば良いか分からない」の順に多かった。

両者を比較すると、どちらも4割以上の保護者が「金銭的な負担が増えた」ことで困っていると回答した。また、「学校の情報が入ってこない」は、中学生の方が小学生よりも15.8ポイント高かった。

⑤ 相談・対応に関すること

児童生徒アンケート（小学生 71名）：担任の先生や家族以外で、学校に行かなかった（行けなかった）ことを相談した人

選択肢	回答数
学校のカウンセラー	10
担任以外の先生（保健室の先生など）	6
フリースクールの人	5
病院の先生	15
相談した人はいない	15
その他	10

児童生徒アンケート（中学生 102名）：担任の先生や家族以外で、学校に行かなかった（行けなかった）ことを相談した人

選択肢	回答数
学校のカウンセラー	24
担任以外の先生（保健室の先生など）	17
フリースクールの人	9
病院の先生	33
相談した人はいない	18
その他	17

児童生徒アンケートによると、「担任の先生や家族以外で、学校に行かなかった（行けなかった）」ことについて相談した人は、小学生は「病院の先生」、「相談した人はいない」、「学校のカウンセラー」の順に多かった。中学生では「病院の先生」、「学校のカウンセラー」、「相談した人はいない」の順に多かった。

小学生の保護者アンケート（85名）：お子さんの担任以外で、お子さんの学校のことを相談した機関

選択肢	回答数
スクールカウンセラー	33
スクールソーシャルワーカー	8
つくば市教育相談センター	21
フリースクールなど民間団体の相談窓口	16
病院、診療所	33
児童相談所	1
その他	17

中学生の保護者アンケート（116名）：お子さんの担任以外で、お子さんの学校のことを相談した機関

選択肢	回答数
スクールカウンセラー	36
スクールソーシャルワーカー	12
つくば市教育相談センター	30
フリースクールなど民間団体の相談窓口	19
病院、診療所	63
児童相談所	6
その他	19

保護者アンケートによると、「お子さんの担任以外で、お子さんの学校のことを相談した機関」は、小学生は「スクールカウンセラー」、「病院、診療所」、「つくば市教育相談センター」の順に多かった。中学生は「病院、診療所」、「スクールカウンセラー」、「つくば市教育相談センター」の順に多かった。中学生が全回答者の半数以上が「病院、診療所」で相談を行っていた。

⑥ 不登校に関する支援について保護者が望むこと（自由意見）

保護者アンケート：あったらいいと思う支援

・学校以外の民間施設 22 件

フリースクール（9） 学習を補ってくれる施設（4） 楽しく安心して過ごせる施設（3）
預かり施設（3） 人との関わりがある場所（3）

・経済的支援 16 件

フリースクール通学への補助金（5） 自宅学習（習い事）への補助金（4）
フリースクールへの補助金（2） 所得制限の緩和（1） 私立学校の学費の補助（1）
学校の教材購入の選択制（1） 仕事の休業補償（1）
保護者のカウンセリング等への補助金（1）

・オンライン支援 15 件

授業動画（ライブや録画）の配信（14） プリントなどの電子化（1）

・学校内制度の充実 13 件

「チーム学校」の実現（2） 公立通信制高校の拡充（2） 学校サポーターの充実（1）
担任への補助（1） 家庭学習への評価制度（1） 不登校専属教員の配置（1）
PTA 活動等の免除（1） 不登校専用カリキュラムの構築（1） 学級選択制（1）
ギフト対応の充実（1） 不登校専門の学校職員の配置（1）

・相談機関の充実 12 件

個別に親が相談できる場所（3） 気軽に相談できる場所（2）
適切な相談機関に関する情報提供（2） 家庭を孤立させない体制づくり（2）
子供が大人と関われる場所（1） スクールカウンセラーの充実（1）
スクールソーシャルワーカーの充実（1）

・学校内の施設利用 12 件

校内フリースクール・居場所（7） 別室でのリモート授業（2） 学校内の環境整備（2）
空き教室の親子利用（1）

・公設機関について 7 件

気軽に利用できる公共施設（2） 公設民営施設の継続（2）
公設民営施設での日数の増加（2） 近くの図書館に行くと出席扱いになる（1）

・地域人材活用 CS 7 件

不登校経験者の話を聞く会（2） 不登校親の会（2） 不登校理解講座（1）
コミュニティスクールで不登校支援（1） 研究機関を活用した講座や体験（1）

・学校からの学習支援 6 件

授業板書とノートのコピー（2） 5教科のプリント（1） 定期テストの自宅実施（1）
学校に行かないで図書室の本を借りる（1） テスト方法の柔軟な変更（1）

・送迎のサポート 5件

フリースクールへの送迎 (3) 日中の学校への送迎 (2)

・医療の充実 5件

訪問看護 (2) 心療内科等へ円滑な接続と診療 (1) 発達外来への円滑な接続と診療 (1)
思春期外来への円滑な接続と診療 (1)

・学校制度の変更 3件

定時制の義務教育学校 (1) 学校選択制 (1) 小規模特認校 (1)

・その他 13件

大学生くらいの遊び相手 (2) 担任の先生との細かいやり取り (2)
合宿形式の子供用自己啓発セミナー (1) 就業環境の改善 (1) 友達とつながる支援 (1)
親と学校の間に入る中立の支援 (1) 強制的に子供を外に連れ出すシステム (1)
ソーシャルスキルトレーニング (1) いじめ加害者と被害者への適切な支援 (1)
昼食の提供 (1) フリースクールへの給食の提供 (1)

保護者アンケート：長期で学校を休むことに対する支援策についての意見

・学校の支援体制 16件

「チーム学校（学校の組織的な対応）」の実現 (4) 不登校にならない学校づくり (2)
いじめ問題への正しい理解とスクールロイヤー等の活用 (2)
配付物の郵送、または電子化 (1) 学習教材の提供 (1)
進路の実現に向けた学習指導 (1) 起立性調節障害への正しい理解 (1)
給食費の徴収停止や日割り計算 (4)

・オンライン支援 15件

授業の配信などの出席扱いとなるオンライン支援 (10)
教育支援センター等が主体となって行うオンライン学習支援 (3)
オンライン学習相談 (1) 通信講座 (1)

・学ぶことの支援 12件

学び方の多様性を認める制度 (4) 学習を補ってくれる支援 (3) 個別の学習支援 (2)
静かなスペースで勉強できる場所 (1) 勉強がきちんとできる場所 (1)
学ぶ権利を保障する仕組み (1) 家庭学習を評価に取り入れる仕組み (1)

・相談場所の充実 11件

進路相談ができる場所の充実 (3) スクールカウンセラーの増員 (2)
気軽に相談できる人と場所 (2) 不登校初期段階での支援の充実 (1)
真剣に子供に向き合ってくれる人 (1) 保護者の相談場所の充実 (1)
いじめ被害者への継続的な支援 (1)

- ・ 民間フリースクール等の支援の充実 9件
 - フリースクールへの経済支援 (4) 学校外の居場所の設置 (4)
 - フリースクールの誘致 (1)
- ・ 不登校児童生徒のいる家庭への経済的支援 8件
 - 民間フリースクールの利用料補助 (3) 経済的支援 (3) 送迎支援 (1) 食費の補助 (1)
- ・ 教育機会確保法の周知 6件
 - 自宅にいる児童生徒に対する周囲の理解 (3) 学校復帰にこだわらない支援の提案 (3)
- ・ 校内フリースクール等の充実 5件
 - 校内フリースクール (3) 学校内の居場所 (2)
- ・ 人と関わる機会の確保 5件
 - 友達とのつながりが途切れない支援 (2) 人間関係を学べる場所 (1)
 - 人とつながること (1) 親以外の大人と関わる場所 (1)
- ・ 訪問支援 5件
 - 家庭の孤独感や孤立感を軽減する訪問サービス (3) 児童生徒と関わる訪問支援 (2)
- ・ 医療的支援 4件
 - 不登校児童生徒のための健康診断日の設定 (1) 病気への理解と適切な対応 (1)
 - 運動不足解消などの生活習慣へのアドバイス (1) 発達障害の検査を受けられる体制 (1)

3 目指す学校のあり方

不登校は全ての児童生徒に関係があるという認識の下、学校は、一人ひとりの個性・思いやペースの違いを捉えて柔軟に対応し、全ての児童生徒にとって安心と魅力のある場となることで、児童生徒が登校したくなるような学校づくりを行う必要がある。

そのような学校づくりを行うためには、児童生徒の個性や気持ちに配慮し、寄り添うという教員の意識が重要であるとともに、学習以外の様々な学校活動を通して、お互いを認め合い、尊重するという児童生徒の意識を醸成することも重要である。

(1) 一人ひとりが自分の居場所を実感できる学校

① 安心を感じられる環境づくり

教員は、児童生徒への深い理解や愛情に基づいた児童生徒との信頼関係を育み、児童生徒の心理的安全性が保障されるような環境をつくる。そのために、教員は、児童生徒が気軽に話ができて、日々の困り事にいつでも向き合える環境を目指し、気になる児童生徒については、指導する姿勢ではなく、配慮・ケアするという姿勢で接することが求められる。あわせて、教員は児童生徒同士もお互いを認め、助け合える環境づくりに努めなければならない。

② 一人ひとりが自分らしく輝ける学校づくり

児童生徒が一つのことをやり遂げる時間や場があり、一人ひとりが学びたいと思うことを自分で考え、判断し、行動できるようにする。児童生徒が自分の良さを発見し、それを磨くことで、達成感や充実感を実感できるような学校を目指す。

(2) 豊かな学校生活を送ることができる学校

① 多様性や個性を認め、伸ばす学校・学級づくり

学校は、児童生徒にとって、学習するだけの場所ではなく、学級活動、児童会・生徒会活動、学校行事、部活動など教科学習以外の活動を通じて自己を知り、お互いの良さや違いを認め、尊重し合うことを学ぶ場所であるべきである。多様な個性や特性を認め合った児童生徒それぞれが幸せを実感できる学校・学級を実現していく。

教員は、児童生徒に思いやりのある心が育ち、一人ひとりの自己肯定感が高まるような学校・学級運営を目指す。そのためには、教員が、発達障害等の特性や性的指向と性自認など児童生徒の多様性について、正確に理解するとともに、それらを常に認識し、学校・学級運営に取り組むことが重要である。

② 分かる・楽しい主体的な学びができる学校・学級づくり

学校では、全ての児童生徒が個に応じた学習ができるように配慮する。また、自分で学習方法

を選ぶこと、身近な事柄から学ぶこと、他者と協力し合いながら学ぶことなど、主体的・協働的な学びの中に楽しさを感じられるような学校にする。

また、令和4年度に実施した長期欠席児童生徒アンケートは、なかなか対面では話しにくい学校に行けなかった理由や学校に対する思い、児童生徒の希望などを調査した貴重な資料である。目指す学校のあり方を実現するためには、このアンケート結果を、つくば市立学校に勤務する全ての教職員が読み込み、理解するとともに、アンケート結果を踏まえた研修を実施し、全ての教職員が不登校に関する児童生徒の気持ちに寄り添うことができる学校づくりに取り組むことが重要である。

4 不登校児童生徒への支援策

つくば市の不登校児童生徒支援に関する基本理念に基づき、目指す学校のあり方を念頭に置き、令和4年度に実施した長期欠席児童生徒アンケートの結果も踏まえた以下の支援策を進めていく。なお、支援策は「学校内における支援」と「学校外における支援」に分けて整理する。支援制度は、国及び県の方針やつくば市の不登校児童生徒の状況等も注視して適宜見直ししながら、柔軟に対応できるようにするため、今後も実情に合わせてより良いものになるよう変更していく。

(1) 学校内における支援

学校施設内における支援は、特定の教員だけが関わるのではなく、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーなどの学校支援スタッフを含め、全ての学校教職員がチームとして対応する必要がある。児童生徒の中には、不登校状態ではないが、学習の遅れや進路、友人や教職員との関係、家庭のことなど、様々な悩みを抱えながら頑張っている者もいる。

① 教員による教育相談

児童生徒アンケートによると、「学校に行かなかった（行けなかった）理由」は、「なんとなくやる気がでなかった」、「身体の不調」、「勉強のこと」など様々である。家族以外でもっとも身近な大人である担任の先生や保健室の先生などが気軽に相談できる存在であり、困ったときは相談して良い、相談することは恥ずかしいことではない、という雰囲気を作る必要がある。悩みを抱えている児童生徒の中には、担任以外の教職員の方が相談しやすい場合もあり、そのような児童生徒のためにも、全教職員で児童生徒の支援に当たり、いつでも、誰でも相談できる体制を整え、悩み事や困り事に早期に対応できるようにする。

そのためには、日頃から教員が児童生徒と積極的にコミュニケーションをとり、児童生徒が先生や他の児童生徒に悩みや不安を相談しやすい雰囲気（環境）を作る取組が必要である。また、アプリケーションなどを活用しながら、児童生徒の心の調子の変化（気持ちの変化）を感じたり、元気のない子供を把握したりすることで、悩みや困りごとを抱えた児童生徒にタイムン

グよく寄り添えるような取組なども必要である。

相談しやすい環境づくりには教員と子供児童生徒の良好な関係性が重要であるが、同時に教職員間の関係性も重要である。教職員同士が話しやすい雰囲気であると、様々な相談に対してチームで対応できるような、協力的な関係をつくりやすくなる。そのためには、校長をはじめとした管理職を中心に、職員室の中でも意識的にコミュニケーションを図ることが求められる。

また、保護者アンケートでは、児童生徒の「勉強の遅れや学力の低下」及び「進路」に関して、特に保護者が心配していることが明らかになった。学級担任を中心に、積極的に情報提供や助言をすることで、将来的な展望を含めた支援することができる。

② スクールカウンセラーによる教育相談

児童生徒及び保護者アンケートによると、回答者の約2～3割がスクールカウンセラーへの相談経験があった。一方、スクールカウンセラーへの相談件数が増加しており、新規の相談が取りにくかったり次回の相談予約が数か月先になってしまったりする現状がある。また、スクールカウンセラーの業務は、児童生徒や保護者からの継続的な相談を受け、児童生徒に対するアセスメントを実施し、教員に対する助言や関係機関との調整や協議等も行っている。現状の各学校での月1～2回程度の勤務では、必要とされている支援に答えきれていない。

この状況を打開するため、スクールカウンセラーを1学校に毎週1人は配置できるように増員を図っていくとともに、緊急時等には勤務校以外であっても弾力的に相談を受けられる体制づくりを行う。

③ 校内フリースクールの整備

児童生徒アンケートによると、小中学生の半数以上が「好きな勉強ができる」、「ゆっくり休める場所がある」、「いつ行ってもいい」学校なら行きたいと回答し、学校はいつ行ってもよく、好きな勉強ができて、ゆっくり休める場所が欲しいと児童生徒が考えていることが分かった。保護者アンケートによると、子供が学校を休んでいるときは「勉強を教えてくれる場所」や「自由に過ごせる場所」、「のんびりできる場所」で過ごしてほしいと考えており、さらに、学校施設に、通常の教室とは別の子供の居場所を整えることを望む意見が10件程度あった。

この環境を整備する一つの手法として、つくば市立学校では、余裕教室等を活用し、児童生徒の相談や学習支援を行う専任職員を配置した校内フリースクールを整備する。児童生徒や保護者にとっては、家から近く通いやすいこと、教室に入りにくいと感じる時に気軽に入れる居場所があること、専任職員が常駐するため信頼感や安心感を持てること、児童生徒が利用するための費用がかからないことなどの利点が想定される。一方、学校にとっては、専任職員が中核となって児童生徒の状況を継続的に把握できる、学習内容を把握でき指導要録に反映させやすい等、児童生徒に寄り添った充実した支援が期待できる。

校内フリースクールについては、令和4年度に中学校1校で試行的に設置したが、その知見を生かし、最終的にはつくば市立学校の全てに設置を目指していく。まず、令和5年度は、中学校及び義務教育学校後期課程においては、既に校内フリースクールを実施している1校を除いた16校に、小学校及び義務教育学校前期課程においては、校内フリースクールの試行的実施として6校程度にそれぞれ設置を予定する。実施に当たっては、実施校のノウハウを生かした学習会を実施する予定である。

また、多くのつくば市立学校では、令和5年度に校内フリースクールを設置できない学校においても、これまで保健室や余裕教室を活用した別室登校を既に実施しており、空き時間の教員を中心に、カウンセリングだけではなく学習支援も行っている。令和5年度以降、校内フリースクールを設置しない学校においても、別室登校の取組を継続又は拡充できるように努め、児童生徒が教室以外でも落ち着ける場所を作っていく。

(2) 学校外における支援

家から出ることができない児童生徒や、学校には行きにくい児童生徒やその保護者に対しては、学校外での支援が必要である。

児童生徒へのアンケートによると、「学校を休んでいるときにあるとよかったと思うもの」として、「一緒に遊ぶ人」と回答した者が6割以上、「人が集まる場所」と回答した者が5割以上おり、他者との関わりを求めている様子が見える。

その一方で、「学校を休んでいるときにあるとよかったと思うもの」として、「一人になれる場所」と回答した者が6割以上、「一人になれる時間」と回答した者が小学生で6割以上、中学生で4割以上いるように、一人で過ごしたいという意思も尊重する必要がある。

また、保護者へのアンケートによると、「お子さんが学校を休んでいるときに過ごしてほしい場所」として、小学生、中学生ともに6割以上が「自由に過ごせる場所」、「のんびりできる場所」と回答しており、学習支援や精神面での支援のみならず、まずはゆっくり落ち着けることが必要であると認識していることも推測できる。

家から出ることができない児童生徒の中には、家族以外と関わる機会が少なく、学習面や精神面等の支援を受けられない、支援につながりにくい状況にある者もいると思われる。また、学校には行きにくい児童生徒の中には、学習に不安を抱えたり、疎外感を感じたりする者もいると思われる。そのような状況を改善、解消するために、学校外での支援に関する様々な取組を行うとともに、関係機関と学校が連携しながら児童生徒や家庭を支援していく。

① つくば市教育相談センターでの相談

保護者アンケートによると、回答者の4人に1人はつくば市教育相談センターでの相談を経験していた。教育相談センターへの教育相談件数は年々増加傾向にあり、相談の予約が取りに

くい現状がある。また、教育相談センター内に設置している教育支援センター「つくしの広場」についても、入級者が増加傾向にあり、学習指導や体験活動等、対応する人員の確保が課題である。これらの課題に対応し、より充実した支援を提供するため、令和5年度以降は教育相談員の人数を増員する。

また、教育相談センターは市北部に位置しているが、家からの距離が遠く利用が困難である方がいると想定されるため、市南部での出張相談会や教育相談センターの新規開設についても検討していく。

② 学級担任による家庭訪問・スクールソーシャルワーカーによる訪問相談

現在は、児童生徒の近況や状況を確認したり手紙を渡したりするため、必要に応じて教員が家庭訪問を行っている。家庭訪問により、学校が児童生徒の状態を知ることができる一方で、児童生徒アンケートによると、回答者の約1～2割が「家庭訪問をされていやだった」と回答しており、家庭訪問をする際には、保護者や児童生徒の意思や気持ちに配慮した上で行う必要がある。

また、家庭や生活環境が心配な児童生徒に対しては、教員とスクールソーシャルワーカーと協力して、その児童生徒が置かれた生活環境への働きかけや適切な機関との連携、家庭訪問等を行っている。より充実した生活相談やアウトリーチを行うため、スクールソーシャルワーカーを増員し、支援体制を強化していく。

③ 公設の不登校児童生徒支援施設の設置

つくば市では、つくしの広場に加え、民間事業者に委託した不登校児童生徒のための支援施設を令和4年度は2か所運営し、児童生徒を受け入れている。これらの施設では、児童生徒を学校に復帰させることのみを目的とせず、自立性や社会的適応力等を身に付けることができるような支援を行っており、一人ひとりに合わせた学習支援や、落ち着いて過ごすことができる居場所を提供している。

児童生徒の学習や活動の様子を学校と支援施設が互いに共有することで、学校が児童生徒の様子や変化を常に把握するとともに、有効な支援が行えるよう、引き続き取組を進める。

④ 不登校児童生徒の保護者への補助

保護者アンケートによると、子供が不登校になってから「金銭的な負担が増えた」と回答した保護者が約4割おり、あったらいいと思う支援として、「フリースクール通学への補助金」や「自宅学習（習い事）への補助金」など、経済的支援を求める意見が16件あった。日中子供の面倒を見るために働くことができなかつたり、フリースクール等の利用料が家計の負担になっていたりとすることが考えられる。

そこで、「不登校支援を活動の主たる目的としている」、「学校との間で十分な協力、連携体制が構築されている」など、特定の要件を満たした民間の不登校児童生徒支援施設を利用して不登校児童生徒が学習支援を受けた場合に生じる保護者の経済的負担を軽減し、児童生徒が社会において自立的に生きる基礎を培うための選択肢の充実を図るため、民間の不登校児童生徒支援施設を利用した際の利用料を支援する。

⑤ 民間の不登校児童生徒支援施設の運営者への補助

不登校児童生徒の中には、市内外の民間フリースクールなどの不登校児童生徒支援施設を利用している者がいる。各施設は特徴を生かし、教科学習の指導に力を入れたり児童生徒の主体性を尊重した様々な活動をしたりしている。

保護者アンケートによると、民間フリースクール等学校外の支援施設の充実又は施設への支援を求める声が9件あり、子供の支援者として、学校のみならず、民間施設の活動にも期待している様子が見えてくる。不登校児童生徒の学習や相談の機会、居場所の提供等を行うフリースクール等民間施設の活動を支援するため、特定の要件を満たした民間施設運営者に対して、児童生徒の支援体制整備及び運営に係る経費の一部を補助し、児童生徒が社会において自立的に生きる基礎を培うための選択肢の充実を図る。

⑥ 保護者に対する相談支援

子供の不登校で悩んでいる保護者は、どこに相談すればよいか、どこでどのような支援を受けられるかといったことが分からずに一人で抱え込み、孤立して精神的に疲弊してしまうことがある。保護者アンケートによると、「相談機関の充実」や「相談場所の充実」に関する支援策を求める意見が15件程度あり、今以上の支援体制が求められている様子が見えてくる。

つくば市は、児童生徒が不登校になる前から、スクールカウンセラーや相談機関、支援機関等の情報をホームページやチラシ等、様々な媒体を通して児童生徒と保護者に周知しておく必要がある。いつでも気軽に相談できる体制を整え、広報することで、保護者の不安の解消を図ることが望まれる。また、学校を通して、保護者同士の交流の場や地域で支援する場を設けたり、保護者同士が相談できる環境づくりの手助けをしたりするなど支援方策を検討する。

⑦ 家庭にいる児童生徒への支援

家から出ることができないため、校内フリースクールや民間の不登校児童生徒支援施設等に通所せず、日々家庭で過ごしている児童生徒がいる。児童生徒アンケートでは「学校を休んでいるときに思ったこと、感じたこと」の質問に対し、小学生は回答者の約45%、中学生は約49%が「自由な時間が増えてうれしかった」と回答しており、自由に過ごしながらか、元気や活力を取り戻していることが見えてくる。

一方で、「勉強の遅れが心配だった」と回答した小学生は約47%、中学生は約65%と、学習面での遅れを心配している児童生徒もいる。また、保護者アンケートによると、あったらいいと思う支援として「授業動画（ライブや録画）の配信」を求める意見が15件、「授業の配信などが出席扱いとなるオンライン支援」を求める声が10件あった。

家から出るとは難しいが学習支援を希望する者に対しては、学校授業のライブ配信やつくば市独自のICT教材「インタラクティブスタディ」、茨城県が単元毎に配信するオンライン授業動画「いばらきオンラインスタディ」等を活用したり、総合教育研究所等と連携したりするなど、学習環境を保障する。